

日本書紀傳

十八卷上

和
一〇五二二號

四十七

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (56)	
函號	特 85	1

内一五六八三號



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教部省
文庫印

皇國書
文庫

皇國書
文庫

日本書紀傳十八之卷

神代上第十六

瑞珠盟約章

穗積重胤

謹撰

一書曰日神與素戔嗚尊隔

天安河而相對乃立誓約曰

汝若不有奸賊之心者汝所

生子必男矣如生男者予以

内一二六八三號

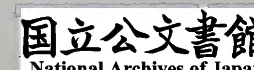
○日本書紀傳十八

○一

ナニニ ミコト テ。セムト ミテ アマノ ハテヲ ノリキキ。 爲子而令治天原也

此ハ傳十六卷小云々如く第一一書小大小類て又異
ある所有る者あり然れども中ハ他傳小勝りて甚愛
たき事ハ二三見元たり其一ハ第一一書小も有が此
の日神の素戔嗚尊小詔給へる御言小汝若不有奸賊
之心者汝所生子必男矣と有て其下小如生男者予以
爲子而令治天原と云ふ御語あり先ハ甚信難く
思ハリしつこも熟考れば第一一書小天照太神謂素
戔嗚尊曰以吾所帶之劍今當奉汝汝以汝所持ハ坂瓊

之曲王可以授予矣如此約束共相換取と有て互小物
根を相換取せ御在り坐て御誓の御事小及ばせ給
ふとして其素戔嗚尊の所持せる物根ハ一日神の
御物なるハ即日神の御子と成給ハむとの御事小て
正書又古事記小此後小詔別させ給へる物實の御事
を已く此小宣給へり者あり 其御心ハ 下章第三一書小ハ素
如有清心者必當生男矣如此則可以使男御天上と有
れども其ふてハ面白くず此ハ天照太神の素戔嗚
尊を未疑ひ所思食し御程の事ハ清心有むとハ
思ふしつこも實小然有むハ如此始め給ハむと
懐慨宣給ふ可き 二小ハ便化生男矣則稱之曰正哉
執ふるを思ふ可く 吾勝故因名之曰勝速日天忍穗耳尊と有る是なり此



ハ素戔嗚尊ハしも下小故日神方知素戔嗚尊元有清
心と有が如く始より清心ハ御在坐しごと其
清心の頭ルさせ給ハざりし如何ハもして其清
心の程を明奉らせ給ハむと所思して御子生給ひ
ける小的當して始小申させ給へりし如く男御子小
在しりバ正し哉我心の如くハ其驗頭ハれたりと
喜バせ給へる余り小我知ず御言小出たりし者かり
第一一書小也故素戔嗚尊既得勝驗と有も同し事小
ハ有れども其ハ御紀の地し云所あるを此ハ正し
く素戔嗚尊の御言小有れば甚勝れり諸此等の
勝ハ我心の如くあるを勝と云ふて日神小勝奉ると
云義小非る事
本より然り 三小ハ即以日神所生三女神者使降居

于葦原中國之宇佐島兵と有る一條かり何れの傳
小も三女神ハしも但宗像大神小御在坐す申の
有て宇佐大神小御在坐す本説無きを此のむ甚美
たき御賜物かり 其説下小云べし宇佐宮の中殿ハ古
稱奉ルる御事あるを後ハ幡大神を祀奉ルるより
以來此主と御在坐す三女神を人皆相殿神の如く
思成し奉ルるむ 〇天安河傳十九丁小云り正書小
天真名井と有り第一一書小天渟名井亦名奈來之真
名井と有り第二一書小堀天真名井三處と云らるど
ハ傳十五 百九十 九丁 小云らる如く此御誓小臨して二柱
神共小相換取給へる物實をしも淳寄て振滌がせ給

ハむ料ある小て別處有ハ非ず天安河の中小て井
 と云べき所小て水沼の所ある者あり然る小古事記
 小故尔各中置天安河而宇氣布と有るどハ直小宇氣
 布とハ有れども河を隔てて相對ハ七御左一坐て輒
 く天照太神の御許小寄近着給ふ可りざらる用意小
 依とあり此の隔天安河而相對と有る右小同く崇神
 十年御紀小進到輪韓河植安彦挾河氏之各相挑焉と
 見えたると先ハ同く狀ある傍有る所ある者あり
 ○隔古事記小ハ中置天安河と有り又其黄泉段小ハ
 尔子引石引塞其黄泉比良坂其石置申各對立而度事
 戸と見え万葉十一二十小紅之欄引道子中置而妾哉
八丁

今多文字毛投越
 都信伎天漢敵太
 而禮漢其可毛麻
 多須辨をき有
 右

將通公哉將來座と有る同く例あり記傳七四十小中
 置ハ中間小隔つるあり万葉十八三十小安麻泥良須
 可未能御代欲里夜別能河波奈加尔敵太豆二年可比
 太知此ハ七夕の歌おれど語の續きハ此の故事を思思
 へる小ヤ取取と見えたる如く置申も隔申も同く意意ふ
 りける者あり又十二十小久方天印等水無河隔而置
 之神世之恨又二十不合者氣長物子天漢隔又哉吾戀
 將居おども見ゆ此も七夕の歌あるが此の故事を取
 出て詠たり者右の中ハ卷のの
 例小異な
 ○相對乃立ハ第一一書小相對而立と同く
 く訓へ傳十六二十十七四十小も云るが對立と云
七丁

八三丁天漢相向
立ゆ云云河

二貫の古傳の方と

事を天河云るハ万葉十
六丁小天漢已向立而又十
七丁天川河向居而又九丁天漢川門立云天川河向立又
三十丁真氣長河向立又三十丁乾坤之初時從天漢射向居
一丁而十八丁三丁小夜剽能河波奈加爾敵太臣云加比太
知又四丁夜剽能河波許牟可比太知臣云是是あり右
等も皆此の故事小因て詠るる事例の如し七夕と
レハ漢國小て起りたる非ぬ跡無し言ふハ有れども
此の文人ハ此章の故事を以て作られたる歌あり故
小今ハ如此く證小引て却りて
彼此徴す事ハ至れる者あり
○誓約曰ハ第一ノ一
書小相對而立誓曰と有と同一所ありバ此も立字ハ
上へ属て訓べりす唯誓約曰小て第二一書小立誓

約とハ同一くさる者あり○汝若不有奸賊之心者
ハ第一一書小若汝心明淨不有陵奪之意と有と同一
趣ハして唯言の換れるのみあり其ハ傳十六一丁小
云の奸賊を阿多那布と訓る阿多ハ敵小て那布ハ辞
あり其ハ神武天皇御紀小兄猾事と聞天孫且列即
起兵將龍望見皇師之威懼不敢敵中略天皇即遣道臣命
察其逆狀時道臣命審知有賊害之心と有小て知れ
たり故其敢敵を延阿多流と訓るを以て敵ハ當小て
此方を目指し來る者を云り今も人小競ひて争ふを
阿多流と云る是なり阿多ハ紀記共小敵をも虜を

も賊をり同く阿多と訓せたり 好字ハ欽明天皇御紀ハ好侯又好心推古天皇御紀ハ好と訓る加多年ハ敵を加多伎と訓と同一義あり名義抄ハ賊を奴須牟又阿多と有り書辭典ハ冠賊蘇兒と有字あり ○若字次ハ如と有リ己小正書ハ如吾所生とも若是男者とも有り万葉十一二ハ馬音之跡狩登毛爲者松陰ハ出曾見鶴若君杵跡十二丁ハ夕夕吾立待尔若雲君不來益者應辛若十九三丁君之往若久尔有婆梅柳誰與共可吾護可牟と有るどハ何れも心ハ危ふ いふふ然し有むり 思ふ事を若と云リ 言義 亦其と云意あるや天孫降臨章第二一書ハ吾所娘是若他神之子者必不幸其是實天孫之子者必當全生

と有て若と實とを並べ對云るを味ハし知べき事あり 俗ハ云ハバ万一あるど云程の意あり字ハ右の若又如るどの外ハ謹とハ或とも備とも書く事あり ○如生男者云云ハ第一一書ハ天照太神謂素戔嗚尊曰以吾所帶之劍命當奉汝汝以汝所持ハ坂瓊之曲玉可以授予如此約束共相換取と有て己小素戔嗚尊の御手ハ日神の十握劍を渡し奉りせ給ひて試みさせ給ふ所ありけりハ素戔嗚尊實ハ明淨き御心御在り坐せしむハ男御子必成出せ御在り坐むと所思し詔給へる所あり然して男御子の成出御在り坐さバ其るも素戔嗚尊の勝驗と得さ

御在し坐す御事ありければ素より天照太神の御方
にも有ま欲く所思し着す所も至らざる少くも有け
れハ素戔嗚尊の成奉りせ給ふ御子とハ申せども物
根の御子なり日神の御子とハ成をせ給ひむとの御
約束少く古事記ハ於是天照太神告速須佐之男命
是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先
所生之三柱女子者物實因汝物所成放乃汝子也如此
詔別也と有る此ハ其生坐る後ハ詔別させ給へる事
るれども天照太神ハ已ハ然る御心御在し坐す殊更
ハ詔給へる者あり
然れども素戔嗚尊ハ此を養て奉
るとも奉りずとも申ふせ給ハバ

りけし其ハ素戔嗚尊ハ物根ハ何ヤも御心ハ御
在し坐す唯男御子を生て一向ハ清明き御心を顯ハ
し奉りむと思疑し給へる所あり但此傳ハ第一書ハ同ト然
る物實を相換させ給へる御事ハ無くして天照太神
ハ御自の劍を食給ひ素戔嗚尊ハ御自の瓊を食給ひ
己ハ物ニして御子を生成し給へる趣ハ有れども
も其ハ已ハ傳十六卷より始て時々ハ云るが如く若
右の如くありしハ掛まらぬ恐なき天統の起原ハ
しハ素戔嗚尊ハして天照太神ハ唯其御子を後世の
養子ハリコの如くして養奉りせ給ふハ成て古意を失ふ事
甚し成以て行く事ハ有らば此ハ正書第一二書

公傳二十三百二三百三
 が如く此小對して吾地
 生女者汝以為子
 而令降於葦原
 中國之有御言
 の有つらむと傳へ
 漏せらるる事
 此米男御子女御
 子小依一別の御
 事御在し坐す
 以知べきる事

又古事記の如く無てハ叶ハざる所ありけれバ云迄
 も無く天照太神の御劔を素戔嗚尊小渡し素戔嗚尊
 の瓊を天照太神小奉りせ給へる御事あり其奉り
 せ給へり御事ハ脱て各其持主の具して御子を生
 成し給へる事小傳の誤れるるれハ右小云所の説小
 於て少クも害無る可き者あり下章第三一書然りと雖も共小物根
 を相渡して相換取らせ御在し坐し趣の傳ありける
 ハ何れも僻事小して天津日繼の大義を失へる者か
 れハ佗傳ニ小参考ハ意〇予以爲子而令治天原也公
 を加へて見ろ可きあり
 下小此文を結びて以爲日神之子使治天原と見えたり
 傳十五三百四丁小委し註せるが如く其物根の由小

縁て天照太神ハ大御父の如く素戔嗚尊ハ大御母の
 如く御在し坐す珍御子小御在し坐す故小天照太神
 の御方小属奉りせ給へり故第一一書小天孫と有ハ
 天神御子と申奉る御事あり下小日神之子と有ハ古
 語小高照日御子と申奉る小同又素戔嗚尊ハ御
 清心所生兒等亦奉於妣云事子と坐ガ故ハ吾以
 又寶劔出現章第五一書ハ吾兒所御之國と詔給
 へる御言 是を以て天照太神の御子と詔給へり事古事
 小多く所見たり天孫降臨章第一一書小天照太神勅
 稚彦曰豐葦原中國是吾兒アハミ可王之地也又天照太神勅
 曰若然者方當降吾兒矣因勅皇孫曰葦原千五百秋

之瑞穗國是吾子孫可王之地也又天照太神之子所幸
道路有如此居之者誰也又聞天照太神之子今當降行
故奉迎相待と見え第_二一書_ハ吾孫_トも作_レ此又天照
太神_ニ持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡
當猶視吾_トも以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾
兒_トも有_リ古事記_ハ其同_ト事を天照太御神之命
以豐葦原_ノ少_ニ秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾
勝勝速日天忍穗耳尊之所知國言因賜而天降也又此
葦原中國者我御子之所知國言依所賜之國也又汝之
宇志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝

心奈何又尔天照太御神高木神之命以詔太子正勝吾
勝勝速日天忍穗耳命今平訖葦原中國_ハ白見え又猿
田毘古神の所_ニ吾御子_ト爲_レ天降之道誰如此而居_ト
も見_ユ右等_ハ御子天忍穗耳尊御孫瓊_ニ杵尊_をも御
子_ト宣給へ_ル例あり又其白禱原宮段_ハ我之御子
等不_レ平坐良志_ト有_リ此_ハ五繼の御孫_ハ渡_ルせ給
ハ_ハも猶如此_ク宣給へ_ルあり此を以て八百萬千萬
繼の大御末_ト申奉_ルとも猶天照太神の直_ニ御子_ト
御在_リ坐_ス御事を明_ルめ奉_ル時_ハ天日の大御光を
頂_ニ仰_ギ奉_ル限_ノ人_ハ皇御孫尊_を恐_レ敬_ヒ奉_ル

ざる事を得ざる者小るむ有ける
予今此例を引出た
しげふ云けること可笑しかりけり
此已小鈴屋大人の
直日靈小子萬御世の御末の御世
多ては天皇命ハ
も太御神の御子と坐て御世
の天皇ハ即天照
太御神の御子と坐と大坐
ける故天神御子とし日
御子とし申せりと云れ
たり始て記傳小委し
云れたる事を知らるる
又更小言立する心小心の浮
れ出たるも思ふ旨有て
止べつゞざればありよ
○令治天原例ハ垂仁天皇二
十五年御紀小天照太神悉治天原
と有り借上章第六
一書ある伊勢諸尊の勅任
小天照太神者可以高天原
也と見えたるが如く高天原
ハ天照太神の所知
看させ御在り坐す事
今更小申奉るも事舊小たり御
事あり然る小此小て天忍穗耳尊
小奉依り奉らせ給

不御事ハ如何と思ふ疑れ有り
又右小引るが如く
天孫降臨章（抄三書）ハ豊葦原中國是吾兒可王之地也
と見え
たり天照太神の大御言ハも合ざるが如く思ゆる事
あるども其ハ猶思慮の至るざりける者あり
光天照
太神の御事より説及らる可し
其ハ四神出生章ある
二柱御祖神の大御言ハ何不生天下之王者歟
と詔給
ひて生奉らせ給へり
驗小因て生出させ給へり
太御神小渡らせ給へば高天原を所知者
御在り坐
つとも猶此天下ハ天照太神の御國あり可き去敢ぬ
由縁有る事已ハ傳十四（四）小委し
説註せるが如く

故上章第十一書ある保食神の御事ハ此より
後の事あるが其の國土人類の爲に物爲させ給ふ御
所爲ある事其所に天照太神喜之曰是物者別頭見蒼
生可食而活之也と詔給へる大御言に依て知奉るる
又神宮雜事記に載る御託言ハ我皇太神第一別
宮荒祭宮也而依皇太神宮勅宣今更所託宣也天下四
方乃人民皆皇太神宮御寶也と云事の省して凡天
下ハ皇太神の天下にして人民ハ皇太神の御寶るる
を以て天原を治給ふことして天下を持たせ御在り坐
す御事を明くめ奉る可くあるむ有ける
又素戔嗚尊ハ
しし上章第六

一書ハ素戔嗚尊者可以治天下也と見えたり如くハ
此國土を保たせ御在り坐すハ示御名を月夜見尊と
申奉りて彼國より此國土を幸給ふ事猶日神の天
原より此國土を統御し給へる等故令治天原とハ高天原を令知奉
給ふ御事ハ然る物にして皇太神の相保たせ御在り坐
す葦原中國を以所知し令坐奉給はむと云事ある可
し然るハ此後ハ保食神の御事有て天津日嗣の瑞穂
出来しければ天邑君を定めて其百姓を長と成し給
へるものと天上の事ハ有れども己に君臣民の定れ
る始るり天忍穗耳尊と申奉るも其瑞穂を所知者す
義の御名ある事傳十五二百二十九丁云らる如く又古事

記御天降段、太子正勝吾勝、速日天忍穗耳命、見
えたり太子ハ日繼の御子と申奉る御事、瑞穂の
御貢を所聞食す御職の名るるを思ふ可し、又其平國
段るる大國主神の御言、唯僕住所者如天神御子也
天津日繼所知之、登陀琉天之御巢而治賜者、有也當
昔己高天原、天忍穗耳尊の天津日嗣所知、
食す皇大宮の御在、ける小就て其天上の儀の如く
新宮造り給へし事を請奉るせ給へるを思ふ可
し右の如く令治天原、有れども事ハ天下の大御
政あるを思合す可き者あり、又第一一書、小三女神を

天降り給と所の御言、汝三神宜降居道中奉助天孫
而為天孫所祭也、有る天孫ハ此天忍穗耳尊の御事
あるが己く天降りて此天下を令知食め奉給はむ御
下心の御在、坐す小依る事を考ふ可き者ありり
然れが令治天原、天照太神の御嗣と成し奉る
せ給はむと云事、此ハ天下を所知食
す御事あり者あり、己ハ云ら如く此天忍穗耳尊ハ
天照太神と素戔嗚尊とニ柱の珍子、渡り給
はれ、生坐し、此天下の大君、御在、
坐、高天原、天津日繼の御政を物為、
始給へる、此執行給へる其天上
の儀の如く執行給へるあり

於是日神先食其十握劍化



生兒瀛津嶋姫命亦名市杵

嶋姫命又食九握劔化生兒

湍津姫命又食八握劔化生

兒田霧姫命

此ハ第一一書小同トクニ女神の成出坐の異説ある
が中ノ殊小瀛津島姫命亦名市杵島姫命ト有るトハ

甚々太トキ誤ある者あり然るハ其瀛津島姫命ト申
奉るも已小辨たりトガ如ク古事記小多紀理毘賣命
亦御名謂奥津島比賣命ト有テ田心姫命ト申奉るハ
本御名小トシテ瀛津島姫命ト申奉るも宇佐島小天
降り御在シ坐著テ後小彼謂ヨル奥島小止住セ給ヘ
る御名小テ中島小坐を中津島姫命邊島小坐を邊津
島姫命テ申奉る類ト有ルバ此小本御名小擧る事
違ヘる小似たり又次小出たる田霧姫命ハト古事
記紀の多紀理毘賣命正書の田心姫命
ト同神ト御在シ坐セバ瀛津島姫命小坐
を別神ト擧る事第一一書ト共ト誤あり又市杵島姫
命ハト同紀ト撰依毘賣命ト有る本未ト違ヘル

此狭依毘賣命と申奉る御名御在し坐まらむ甚愛た
く所思えたる彼長を田心姫命と申すハタカ諾有あり申
を狭依毘賣命ハ進すす動あり季を湍津姫命と申すハ出い
して御誓の時小天照太神の大御心進諾すすせ給へる
小因て号奉給へる御名小して三女神共小一對ヒトカヒの御
名小御在し坐せば其生坐まがりの御名共あり地神
本紀小も佐依姫命と有れども御紀ハ惣むすて其御名
ハ御在し坐ざれども其御名の所小當りて市杵島姫
命と有を強て尤め云べきありざれども市杵島と云
ハ其所在す島名を以て称奉れる御名ある事著けれ

バ素より天上あまにてハ御在し坐ざる御名あり此小市
杵島と云名の必無てハ叶なざるを傳十七 丁小考
註せるが如く其ハ中島の亦名小有ければ瀛津島
姫命の亦名として大違小所有る者あり又又於伎都
と音の通へるを捉へて同神と心得居る輩たぐひ古も
有と雖も三女神の條理を甘く知れる人の言ありざ
ルバ云小 ○田霧姫命古事記小多紀理毘賣命と有と
も足たはず 同ト唱なへて御紀の田心姫命と同神小御在し坐る
あり然る小此も第一一書と同トく一を瀛津島姫命
二を湍津姫命三を此田霧姫命と別神の如く出せ此
ども右小引る古事記ハ更あり地神本紀小も田心姫

命亦名奥津島姬命亦瀛津島姬命坐宗像奥津宮是所
居于遠瀛者也。見え又古事記に大國主神娶坐胸
形奥津宮神多紀理毘賣命正しく見えたる上ハ上
の瀛津島姬命と有ハ此田霧姫命の遠瀛小御在坐
小因ル亦名小一有けれバ誤ある者あり。然ル
此順次を定む時ハ田霧姫命市杵島
姫命湍津姫命と有べき所少て有る。

已而素戔嗚尊含其左髻所
纏五百箇統之瓊而著於左

手掌中便化生男矣。稱之曰
正哉吾勝故因名之曰勝速
日天忍穗耳尊復含右髻之
瓊著於右手掌中化生天穗
日命復含嬰頸之瓊著於左

ミコトヲノ 命ミコトノ 亦ミコトノ 名ミコトノ 熊クマ 野ノ 忍ニ 隅クマ 命ミコトノ
マタ 又ヨリ 自ヨリ 右ミギ 足ノ 中ノ 化シ 生ス 熊クマ 野ノ 忍ニ 踏ム
ヨリ 自ヨリ 左ヒダリ 足ノ 中ノ 化シ 生ス 燐ヒ 火ノ 速ハヤ 日ヒノ 命ミコトノ
ヨリ 右ミギ 臂ノ 中ノ 化シ 生ス 活ヒ 津ツ 彦ノ 根ノ 命ミコトノ 又ヨリ
ヨリ 自ヨリ 左ヒダリ 足ノ 中ノ 化シ 生ス 天アメ 津ツ 彦ノ 根ノ 命ミコトノ 又ヨリ
ヨリ 自ヨリ 右ミギ 臂ノ 中ノ 化シ 生ス 天アメ 津ツ 彦ノ 根ノ 命ミコトノ 又ヨリ

此と下章第三二書ハ五男神を六男と傳へたる異
 説あり諸正書ハ素戔鳴尊乞取天照大神髻髮及腕所
 纏八坂瓊之五百箇御統と見えたるハ古事紀ハ各珠
 を纏持せら小先左御美豆良次小右御美豆良次小御
 鬘次小左右の御子と合せて五所小五男神の數小
 合せたる者小て同トキを此ハ右の左右の御髻と
 御頸珠との三の小して次ハ自右臂中又自左足
 中又自右足中と有る此三ハ瓊を著て御子と化給へ
 りとも見えざる唯子唯足より成坐る趣小して其左手
 の方ハ復合嬰頸之瓊若於左臂中と有ると同じ左右

の御臂こして事の異なるを如何いき事ありけれ
バ此こ就て考る小此ハ正書こ詰然咀嚼と有り第一
一書こ食と有り第二一書こ嚙断と有り其とハ異か
る者こして此ハ右の御頸珠を左右の御臂左右の御
足こ著置せ給ひて御子を成給へりと見ゆ然れども
事より始て甚く異なる傳あり此こしてハ先こ所見た
る天安河も又傳こ小在る天真各并るども用無き事
の如し又其瓊の左髻右髻こ纏せると嬰頸この三のこ
ある小説有り已も辨たるが如く第三一書の傳こ
瓊より三女神こ五男神の成出給へるハ本説か
るを此ハ其物根を各相換給へりし傳を亡ひたる故

小此こ例の如くこ三女神ハ化生し瓊こ六男神ハ
化生る趣あるれども切りて古事記又正書の如くこバ
こそ有め六男神こ三の瓊を以て合さむと爲しら
然る左右の御足の事こ及べりしどこ然る足ありて
小玉を著させ給ふ事の有べくも非るを熟思ふ小此
も眞の古傳ハ天忍總耳尊天穗日命天津彦根命の三
柱あるを六男神とも云ふ異説の有こ合せむと爲し
りら亦各相重複りて六數こ合るを以て右の三の瓊
をも手足までこ着て御子を化生し趣こ成して傳へ
たりし者ら事明けけ

下章第三一書ありし六男
神ありし其こハ左髻と右

髻との二有て天津彦根命以下四神の化生るハ何
の事も無を思ハ上古ノ瓊（イ）男神子の成坐り
傳ハ非りつるハ正書あるとの趣ハ合せて然ハ物爲
くゞども猶詳々あるゞり者之所見たり左右ハ六
男（ニ）爲るハ實の三男（三）○左髻右髻ハ正書天照太神の
神（四）信（五）したる傳あり○左髻右髻ハ正書天照太神の
男の装を成給へる所ハ結髪爲髻と見えたる是あり
口訣ハ合左右髻之瓊化生忍總耳尊天總日命者於御
子中爲貴謂也髻爲左右以可知神代男體と有り己ハ
古事記黃泉段伊邪那岐命の御體を云ハ左之御美豆
良又右御美豆良又御髻の御事見えたるハ男神の御
髪の状態り委（六）ハ傳十五（七）ハ註せらるが如ク此髻
を母登杼理と訓る名義抄も然り和名抄ハ髻和名毛

止々利鬘也鬘和名美豆良一云訓上同屈髪也と見え
名義抄ハハ鬘字美豆良又母登杼理と訓り右ハ美豆
良ハ男髪を（二）結縮（三）たる形を以云ハ母登杼理ハ
其本を結び別つハ因ハ稱ある可ク此ハ女の髪を
れども天武天皇御紀ハ垂髪（四）背（五）有ハ髪の本を結
て背ハ垂りたるを云て母登杼理とハ其結ハ事
を云て万葉ハ髪結を母登由比と訓るも其意あり然
して此ハ上の如ク美豆良と訓べき所あるハ又母
登杼理と有る訓ハ棄てきハ非ハ舊訓ハ後ハ又
名義抄ハ髻を母登杼理とし米邪志とも有り此ハ
名抄ハ髻髪和名ハ于奈爲（六）有ハ其ハ髪を結分るハ
因

れりバ同建曆御記小御本鳥紫絲也本鳥取末ニ分也
是非臣下作法帝王御作法也略時只有非憚可然之時
必可結分也尋常結分也と見えたるを階梯小古事談
を引て按光孝天皇即位以前于時式部卿上野太守結分本鳥給
云云と見え又雅亮裝束抄小内の御本鳥取る事も同
し事あり總ノの結様替るるり總をニ附て小本結ニ
して別ニ小ニ結ユあり其鈎カギの手を左右小結ニバ左
ハイラケヒ女結ニ為ル其ヨキ宜カふり本鳥を取ハ習ふニ依ルるニ
天性の子利ニ依ルるニ有ルをも引れたり此を傳十
五百三小引り年中行事裝束抄小合せ見る時ハ近世

小至る迄も然る可き時ニ小ハ猶上古の髻の様小御
本鳥を結分させ給ハるニあり又大鏡ニも小野宮の南
面ニハ御本鳥放ちて出させ給ふ事ハ無クりニ其故ハ
稻荷の杓の頭ニ小見ルゆニハ明神御覽ニハシ小争テ
無ク礼ニけルハ出スむニ宜カせて甚ク慎ムるニ給フ小自
思ハ忘ルれル時ハ御袖を被ゲせ給ヒて敬ム騷ガ給
ハるニ略ト云フ時ニ見ユ右ノ本鳥ト云ハ借字アリ正シ
を母登リ理ト訓ムくニ就テ其例共をウクニ引タるニ小ト有ケルニ本説ハ十五ニ云リ○所纏ハ麻
加勢流ト訓アリ玉ハ緒ニ貫テ頭ニ也手丸ニ纏ク物
あルハ云リ正書ニ小便以ハ坂瓊之五百箇御統纏其髻

二坪隱口乃泊瀬越
才我手二纏在玉者
乱而

鬢及腕之見之古事記小凡乃於左右御美豆羅亦於神
鬢亦於左右御手各纏持八尺句惣之五百津之美須麻
流之珠之有是乃万葉二十二十小阿母刀自母多
麻尔母賀母夜伊太伎互美都良乃奈可尔阿敞麻可麻
久母之有ハ三四十小伊奈太吉尔伎須賣流玉者無二
此方彼方毛君之隨意之詠之類小して此有る左鬢左
髻の瓊小同しき由傳十五八十小云々が如し二二十
小玉有者手尔卷持而三三十小綿津海乃手二卷四而
有珠手次又四十奈何其玉之手二卷難寸又四十玉有
者手尔卷以而不戀有盆雄四四十小玉有者手二母將

二多麻尔母我子尔
麻吉七知底

卷子鬱騰乃世人有者手二卷難石又五十吾念此而不
有者玉二毛我真毛妹之手二所纏年七二十小海神手
纏持在玉故又海神持在白玉見欲又三十白玉子手者
不纏尔画耳置有之人曾玉今永流又照左豆我子尔纏
古須玉毛欲得其緒者替而吾玉尔將為又海底奥左玉
字手纏左右二棹四香能芽二貫置有露之白珠
相佐和仁誰人可毛手尔將卷知布十一九小白玉纏持
從今吾玉為又白玉從手纏十三八小子二卷流玉毛湯
良羅二十七三十小我加勢故波多麻尔母我毛奈子尔
麻伎尔見都追田可牟子又四十和我勢故波多麻尔母

我毛奈略^中于尔麻伎底由加牟十八^ニ十^ナ小安由流實波
多麻尔奴伎都追于尔麻吉互見禮騰毛安可受るど見
えたるハ于^ハ小纏持つ據あり 又三卷小朝尔食ふ欲見
離有牟と有^ハ小纏とハ無^ル此^ハ同ト事あり又十卷小
劍後玉纏田井尔と有^ハ八卷^ハ劍尻^ハ上古^ハ玉を纏たるハ
故ふるを八卷七夕歌^ハ玉纏之真可伊毛我母九卷小
玉纏之小棍繁貫十三卷^ハ玉纏之小撒毛鴨と有る類
ハ棍ちど^ハも緒して貫 ○五百箇統之瓊ハ下章第三
一書ふるも五百箇統之瓊綸^ハ有り日本紀竟宴歌小
耶佐賀珥迺伊明^明津儒波屋女濃儂莽登胡楚耆鷄と云例
も有^ル此^ハ統を須麻流との訓ても可^カりむむ^ハあれ
ども熟思ふ^ハ彼ハ歌詞かり其句の置所^ハ依て約も

延^ル自由^ハ小爲る者^ハ有^レけれバ此^ハ御統^ハ訓付べ
き事傳十六 ^{三十} ^{六丁} 小註せらを見て曉る可^ク ○含^ハ御
口^ハ含^セせ給へるあり正書^ハ齧然咀嚼と見え第一
一書^ハ小食^ハ云^ハし第一^ニ一書^ハ小嚙断と有り此^ハ先の
三女神の所^ハ食^ハと有^ル小當^ルる所^ハあるを思ふ可^ク
古事記^ハ小咋^ハ破^ハ其木實含^ハ赤上唾出者其大神以爲^ハ咋^ハ破
吳公唾出^上而於^ハ心思愛而寢と見えたる咋^ハ破^ハ咀碎^ク
を云^ハれバ此^ハ然^ルて其瓊を咀碎^リせ給へるを口^ハ
含^リせ給へるあり又海神宮段^ハ小解^ハ御頸之瓊含^ハ口
唾^ハ入^リ其玉罌と有^ル右^ハ同^シりる可^キ者あり
含^ハと云^ハ事^ハの義

△傳三十卷七頁十
 上云を合せ見る可
 一陸奥忠社巻を
 古言の頂上を
 蓬菜の山成を
 多那字を
 中山黄金の大庭
 を作らむこと
 忠社の云し事
 遺へと云食給
 心程は

ハ已ハ傳十一卷八十三丁ハ説ハ此ガ今云ハ限ハ非
 ルバ此ハハ一二の例を舉見ルハ右ハ此の事状を
 想像ル
 ○左手堂中右手堂中ハ下章第三一書ハハ

左堂右堂と有り堂中と多那字良と訓ハ手裏の義
 り名義抄ハ堂と多那基許呂とも多那字良とも多

那曾古と見ゆ然ラハ和名抄ハ堂和名太奈古今呂一

云太奈曾古手心也と云ハ多那字良と云訓を落セ

リハ者あり

右の下章の堂をも多那字良と訓ハ寶劍

出現章第六一書ハ堂中を有を然訓ル

古言ハ

○著ハ此ハ伊氏と云訓有ハ音便あり故

其本ハ返して於伎氏と訓ハ諸古事記海神宮段ハ

解御頭之與舍口唾ハ其玉器於是其與著墨婢不得離

故瓊任著以進豊玉昆賣命と有ハ甚能似たる事ある

右の二の著字ハ都久と訓べき所あるハ依て此ハ

然らむと先ハ思ひハ彼ハ器ハ著て離れ

ざるハ其訓ハ且ハ此ハ下章第一一

書ハ置之左堂とハ又置之右堂とハ有ガ如ク其碎キ

合マセ給ヘラ瓊を手心ハ載セ給ヘラハ此ガ著字

ハ置と同一く訓べき所ありけり寶劍出現章第六一

書ハ少彦名命の御事を大己貴神即取置堂中而翫之

別跳雷其類と有を思合テ可キ者あり

名義抄を見

盧反ハ志流復又阿良波須ハ訓ハ略反ハ伎

流ハ波久ト直略反ハ登杼麻流又伎多流又都

久と見え申怒反して於久とも那流とも阿伎良加那
理とも那流とも阿都麻流とも訓此が此の著字も中
略反あるを被用て置とハ訓せたるありけり出雲風
土記意宇郡母理郷の下小玉珍置賜而守と見え万葉
七卷小白玉字子者不纏尔匣耳置有之人曾玉
令泳流と有る此とハ別ふ此と置例あり○化生男
兵ハ比古美古那志給此都と訓べ即上ある日神の
御言小汝若不有奸賊之心者汝所生子必男矣と詔給
へる小合せて的當して其清明き御心の驗有る所を
此バ語を約て右の如く訓ずてハ勢無く又下小此事
を承て其素戔鳴尊所生之兒皆已男矣と見えたり儲
右の三の男字ハ更なり第一一書ふる男字ハ共小比
古美古と訓べきあり記傳七五十九丁小男子女子ハ比古

美古比賣美古と訓べ孝元天皇七年御紀小生二男
一女ノコト出仁天皇十五年御紀小生三男二女ノコト景行天皇二
年御紀小生二男同四年小生七男六女ノコト夫天皇之男
女前後分八十子仲哀天皇御紀小雅足彦天皇無男故
立爲嗣應神天皇二年御紀小凡是天皇男女分二十王
也るど有る此等の男女を然訓る小依補と有る
因ノコト但右の中ノコト出仁天皇御紀の二女を唯比賣との
ハ誤るノコトり必多○稱之日と言舉而詔給波久と訓り強
く心ノコト思勵ノコト也事と言ひ立るを云事ノコト已ノコト傳ノコト十ノコト三百十
小云らノコトか如く寶劍出現章第五一書小乃稱之日杖及

椽樟此兩樹者可以為浮寶檜可以為瑞宮之材云々
有也先小然る衆木を成給へる小就ての御言舉る
又其第六一書小大已貴神の乃興言曰夫葦原中國本
自荒芒至及磐石草木咸能強暴然吾已摧伏莫不和順
遂因言今理此國唯吾一身而已其可與吾共理天下者
蓋有父子と有也此天下を經營給ふ由を事々々
言立給へるる景行天皇四十年御紀小日本武尊の
欲往コトケケシマツ上総望海高言曰是小海耳可立跳渡乃至于海中
と有ハ海の小きを慢りて立跳コトケケシマツも渡りつ可くと其
御勢小任せて事々々言立給へる小て何れも物小

自負する所有て誇る如き時あるを言舉るハ云あり
けり又神武天皇御紀小昔我天神高皇產靈尊大日靈
尊舉此豐葦原瑞穗國而授我天祖彥火瓊杵尊
又神功皇后御紀小既而舉皇后之命あど見えたり舉
字を能多麻此阿宜此と有也事を云立ち小て此と同
可來男常曾念七ハ小此小川白氣結瀧至八信井上小
事上不為友十二九小大方者何鴨將戀言舉不為妹小
依宿牟牟者近侵十三九小蜻島倭之國者神栖跡言舉
不為國雖然吾者事上為又十葦原水穗國者神在隨言
舉不為國雖然辭舉叙吾為中略百重浪千重浪敷尔言上
為焉あど見えたり也皆事を事々々言立るを云て

此の稱之コトナフ同ト名義扱コトナフ不稱字を加奈布コトナフも能多婆
 とも得年とも久し波加理とも波加流とも阿具
 とも伊布とも伊波久とも與志○正哉吾勝ハ傳十五
 二百ニ
 十六丁小云り如く上章第八一書小正勝山祇と云
 ふ神名有を正勝此云麻汝柯と注され其同神を古事
 記小正鹿山津見神と有を以て其訓を知べく諸此正
正書小大誓約之中必當生子云と有も同事云
 ハ下章第三一書ふり素戔嗚尊の誓言の御言小如有清
 心者必當生男矣と有り又天照太神の其を承て宣給
 ふ御言小當りて此小汝若不有奸賊之心者汝所生子
 必男矣と有を第一一書ハ汝所生兒當勇矣と見え
 たる當マカニの言小合せて實小先小誓云宣ひつらケ如く

正マカニき哉其驗の有けるあり申させ給へらふて其一
 書の終マカニ素戔嗚尊既得勝驗と見えたる是あり此誓
 小限マカニずト事ありマカニ信小驗有るを正と云り万葉
 二丁三小大船之津守之占尔將告登波益為尔知而我
 二人之寝之と有る益為ハ借字マカニして正の義あり十一
 丁小事靈八十衢夕占問占正謂妹相依と有る占正謂
 ハ占を偽マカニず言ハマカニ云あり十四丁小武藏野尔宇良
 敵可多也伎麻左氏尔毛と有る麻土氏ハ賀茂翁説小
 正定ありしと云れたるが如く右の十一卷の歌を拾遺
集十三小人麻呂正
 八十八の衢小夕占問マカニ占正マカニ為マカニ妹マカニ諸此正哉小
 逢マカニべくと有を以て正マカニあるを知マカニべし

實哉の義大小在べきあり上座第一書小吾所以来
者實欲與卿相見云々と有る實ハ素戔嗚尊の偽無キ
本心を聞え奉らせ給へるあり然る小天照太神の汝
言の實將何以為驗と詔給へる小生む所の男女の御
子を以て清濁を定給ひむとして御誓言為させ給へるふ
的當して其實の驗の已小如此顯はれたる所あり此
あり古事記玉垣宮段小故令曙立玉令字氣比白月此
大神誠有驗者住是鷲巢池之樹鷲字字氣比落如此詔
之時字氣比其鷲墮地死又詔之字氣比活尔者更活と
有る誠有驗者ハ正しく驗有るバと云事あり此を以

て正と實との意の相近きを思ふ可字面小て正と
と偽と相反するを以て其同じきを曉る可き者を
り言義ハ正ハ真其實ハ真事小て其終一あり言あり
哉の意ハ神武天皇御紀アカツ吾勝ハ古事記小須佐之男
慨哉の下云マキあり命白于天照太御神我心清明故我所生之予得于弱女
因此言者自我勝云而於勝佐備云々と有る于弱女ハ
男御子もとの誤る可けれど右の我勝ハ此の吾
勝小同く其勝佐備ハ勝進と給ふ事あり此の勝
速日小異るく第一書マキの故素戔嗚尊已得勝驗の
勝もど共小吾心の如く成るを勝とハ云る少して先小
申給へり言の虚るかり驗の見えたるを誇り

り言擧させ爲させ給へる故に即其生坐し御子
の御名に冠ふせ奉給へる事傳十五二百二小森
く云らば如く古昔ハ物事ハ巧む事非りけるが故ハ
ハ進動湍津ハ高出るが如く其事の有は任小名に
爲る事あり小等しく此言擧爲させ給へり御言
を語の上置て○名之ハ其物其事小因て名附るを
称奉れる者あり云あり古事記玉垣宮段小亦天皇命詔其言凡小名
必母名何稱是子之御名尔答白今當火燒稻城之時而
火中所生故其御名宜稱本年智和氣御子と有り又仁
徳天皇元年御紀小天皇曰今朕之子與大臣之子同日
共産兼有瑞是天之表焉以爲以其鳥名各相易名子爲

後葉之契也則取鷓鴣名以名太子曰大鷓鴣皇子取木
菟名号大臣之子曰木菟宿禰と有り上代小物小名
る有狀あり又行事小因て名小負する有り委し
傳四十八丁又小云り万葉三二十小言不得名不知靈
母座神香聞石花海跡名付而有毛又五十言毛不得名
付毛不知六二十小大汝少彦名能神社者名著始難日
名耳子名兒山跡負而又二十直超乃此徑尔師互押照
哉難波乃海跡名附家良思裳十六十小農常名付而與
副子六香聞十八二十小與呂之奈倍此橘子等伎自久
能可久能木實等名附家良之母と見えたり名義抄
小名字

を那とし那那志とし布々年とし那豆久とし有り又
号字をし那とし那豆久とし訓たり右の名著又各附
の義あり○勝速日天忍穗耳尊ハ傳十五二百二十云り天
孫降臨章第七一書小勝速日尊兒天大耳尊と有り其
天大耳尊と申奉るハし天忍穗耳尊小渡らせ給ハ
れバ勝速日尊ハ素戔鳴尊の御名と聞えたり然らば
上るる正哉吾勝ハ御言ハ誇らせ給へるあり勝速日
ハ古事記の勝佐備と同一事して此ハ其行ハ勝進ま
せ御在り坐し御事共の有けむり然稱奉らるを其
生坐し御子の御名ハ冠て稱奉らるあり御子あり
る由緒の御在り坐しハ神名式ハ出雲國出雲郡大穴
持伊那西波伎神社大穴持海代日古神社大穴持海代

日女神社の類有
ハ此の例あり ○嬰頸之瓊ハ第一一書ハ己而素戔
鳴尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊と有り同一物して
謂ゆる御頸珠ある由傳十六三十四云るが如し但右
ハ此一連願の玉以て五男神を皆今生給へる由あるを此
ハ天津彦根命以下四神の此一玉ハ因て成坐るハ
若くハ右の第一一書の如く有るを正書の傳と混ハ
成て左右御髻の瓊の事は有るむ然るハ上あるニ
神の物根ハ各一宛別々ハ在り下ある四神の物根の
一なるハ疑ハ可き者あり若一連の玉より成坐るハ
くむハ第一一書ハ云る如く瓊瑞瓊中瓊尾の三ハ

小て成れる神ハ己ハ云る如く三男神ある可く又各
物實ハ小依て一神の成坐ると云ハぐ左右髻と御頸
あると合せて此ハ三より非ルバ生坐る神等も必三
神ハて天忍總耳尊天穗日命天津彦根命三柱の外無
きを餘ハ亦名の重複りて別神の如く傳ハれり者
あり但五男神の成出させ御在し坐し物根ハ
物實ハ第一一書あれども此ハ瓊と有る故
小其ハ依て敷を立るとこそ有けれ
其實ハ瓊と云ハ傳を予ハ取ざるあり○自右臂中ハ
上るるハ著於左臂中と有て著ハ即右の瓊を置と
云るるハ此と此下ハ自左足中又自右足中と有ハ此
三神の物根ハし右の天津彦根命の物根と一ハて

有る由ありめども然ハ聞えざる者あり下章第三二
書ハ天津彦根命以下ハ物根の御在し坐ざるを
トを思ふハ決く其實ハ成坐る神ハし三柱ハ坐し
又其物實ハしハ劍ハ御在し坐るを中古ハ正書あり
の狀ハ改つるより然打合ぬ事共ハ出未ハたる者
あり所見たりけり又右臂左足右足より成坐し神の
物實御在し坐ざる時ハ長寛勳文ハ伊弉諾大神の御
子を生給へり異説ハ陸上立時身体左肩忍奈豆流時
成出未神名云々又右肩忍奈豆流時成出未神名云々
云ふ類と云む然れども此ハ其物根ハ就て其所屬

の定まる止事無き所あり有ければ左右小信あり難
くあむ有ける 此を或人の正書なり天忍總耳尊の
物根を云て餘の四柱神を次之有れ
バ其例して上より推行く所あり先ハ著於左
臂中云て此ハ自右臂中云るハ此ハ左ハ倣
ハるカメり云れども然らず正書ハ上ハ左右髻又
御髻又左右腕と五所の瓊を云て下ハ其小合せたり
五男神あれバ其次ハ皆上あり物根小引合ふ所あれ
バ此と一ハ成難り斯レバ如何ハして異る
者あり ○燖之速日命下章第三一書小ハ燖速日命
と見えたる此二のミあり上章第六一書伊弉諾尊の
軻遇突智神と斬給へる所小復劍鐔血激越為神号
曰燖速日神次燖速日神其燖速日神是武甕槌神之祖
也こ有り又天孫降臨章小有天石窟所往神稜威雄走

神之子燖速日神燖速日神之子燖速日神燖速日神之
子武甕槌神と見たり如く慥小燖速日神の御子
わして武甕槌神の御父小御在る坐る上ハ此小燖之
速日命と有ハ決く其混れある可き事已小口訣小第
五燖之速日命者伊弉諾尊斬軻遇突智時劍鐔血激
越為神号二神号也と云るを始て先師等も其説小從
ハ此予も亦其小就て發明^{アラキム}説有て傳十七 九十
五丁 小云
る如く上の第三一書小素戔嗚尊の嚙斷劍末と有る
劍末ハ劍鋒の事あり 本と對ハナラ 語ありけし中
ハ劍及小當り末ハ劍鐔小當りて五男神と云れども

實ハ天忍穗耳尊天穗日命天津彦根命の三神ありけ
 れバ此のて劔鏢少因て神の生坐る傳ありり入交
 り混ひつる者ありとと思ひりども孰思ふ上章
 第六一書ありハ燖速日神少燖之少ハ非ず此を
 るハ燖之速日命少燖速と直少續ける少ハ非る
 あり 其事已少傳十卷百四丁少粗云りけれど未其
 事の意を盡さざりければ此少至りて再説くを
 り然れども其名義の
 如きは今云限少非ず 其ハ出雲風土記少大原郡斐伊
 郷屬郡家樋速日子命坐此處故云樋 神龜三年
 改字斐伊 官社少樋社又樋社とニ社並出たり此を神名式少稽
 る少神名式少斐伊神社同社坐斐伊波夜比古神社と

斐伊ハ風土記に見
 えたり如く本、樋を
 る不韻伊を添た
 る少日本國と紀伊
 少書ても其唱後
 るるが如く此は斐
 伊と書ても斐文の
 一少少云例あり
 此字

有る此を斐伊波夜とハ訓べりりず斐伊能と云べさ
 あり 諸此ハ寶劔出現章少所見たる謂ゆる數川是
 かるが上章の燖速日神の古より鎮御在り坐ける
 少少已少素戔鳴尊の當昔然る地名の有けむが如く
 思めりり事ありども其時の御事ハ其河上あり鳥
 髪地と云少在り事少て數川の地名少預る事無れば
 後名を及ぶ少書れたりと云むも強説ありざる可
 備上章の燖速日神ハ火神少縁有る神少坐るを古事
 記少此地を肥 河上と書されれば肥を上聲少
 樋の如く唱へたり少て平聲耳少火と云ふ如くハ非る

小し考ふる所存べき事あり若て其燖速日神ハ右小
引る天孫降臨章小見えたる如く高天原小在る天安
河の河上あり天石竈小所住神と有れバ本より此國
土小御在り坐す神小非れバ決めて右の攝速日子命
とハ別神ある事申すも更なる御事あり但古事記ハ右の燖速
日神の子ある燖速日神と攝速日神と作れバ風土記
の攝速日子命と合へれども各其書小因て書様ハ異
ある者あれバ強て論ふ可小非ず改此燖之速日命を此の男御子等の
列小取成して見る小燖ハ下小燖ハ干也此云備と有れ
ハ本より此と訓べき事今云よむ非ず履仲天皇御
紀小劔刀太子王也と有ハ劔刀の身と云意小て此ハ

續け宣へる者あり斯れバ此比ハ身小て其身ハ此男
御子等の成出させ御在り坐る物根の十握劔を云ふ
り若て速日ハ天忍穂耳尊小正哉吾勝勝速日と上小
冠て祢奉れり其正哉吾勝ハ誓小勝せ給へる御言擧
あり勝速日ハ天孫降臨章小依て素戔嗚尊の勝進ま
せ給へるを以て其御名小負せ奉れり事上小れ云る
か如く然れバ燖之速日命と申すハ其十握劔を以
て男御子を成出させ御在り坐小依て勝速振とせ給
へる由を以て祢奉れり御名あり又上章第六一書お
る燖速日神の御刀の鐔より成出させ給へる小右小

云らぐ如く第一一書を立て見らふ劔末劔中劔本こ
其御折給へる三段ふ天忍徳耳尊天穂日命天津彦根
命三柱成坐ルバ天津彦根命の成出坐し所在ハ劔鐔
以て有ハ同名の神ありて其成坐る事本も同トキ小
依て疑ふ可き状あるれども其ハ偶然なる小こそ有けれ
實ハ同名異神ありて彼ハ彼此ハ此ありて相等しり
さる事右小説る義を以曉る可きあり然此とし上を
嚴速身と云事ありて其を劔ハ因ルヲ御名あり燧速日
神と申すも其御祖ハ當る火産靈神を古事記ハ火之
夜藝速男神と申すハ火之燒速と云事あるれバ其意ハ
て火速身と云事ありて其ハ劔ハ因ルヲ御名あり此
の速日と右の速日とも同トキされバ借此の燧之
言義を説分と見る時ハ悉く別神と見ヤ

速日命と申すをむ決く右ハ云る天津彦根命の亦名
と聞えたる其ハ正哉吾勝と言舉給へるを天忍徳耳
尊と称奉り其奇異ハ御生坐る由を以て天穂日命の
本名櫟樟日命あると後ハ出雲ハ位坐りし地名を負
せて熊野櫟樟日命と申し又其勝験を得て躡詰坐し
あとの事ハ依て忍踏命と申し大小勝進ハ給へる由
を以て忍隅命とも大隅命とも申奉れりて皆其御
誓の時の有状を以て称奉れり御名ある事傳十五卷
より始て次と註せるが如く借又天津彦根命の亦名
を活津彦根命と申す活津ハ正書ハ吹棄氣噴之津霧

所生神と有り第一書小吹出氣噴之中所生神と有
ルバ其意ある事傳十五二百八十五丁云るが如く又此小
燖之速日命と有る燖ハ右の物根ある十握劍あり速
日ハ彼勝速日の意を以給奉ルル少て此小成坐る神
等ハミシヤ皆其御誓の時の行事を以て御名小負給ハ
小能心を相通ハして見る時ハ必しも此小無てハ得
有まじき亦名共小有む有ける但此ハ予己小考定め
テ三女神の物根をバ
瓊ニ五男神の物實をバ劍とせら傳へを堅く執ら
故ハ此よりハ彼よりハ寄來る説るハ他家小合さ
る説ある事二百七十一丁傳十五二百七十一丁引て己小註る出雲
風土記小意宇郡屋代郷神天乃夫比命御伴天降來坐

伊支等之遠祖天津日子命詔吾靜坐將國社詔故云社龜
三年改三見えて國平の御使小天穗日命と共小天津
彦根命ハ天降給ハリ一証文此小在あり故此小右の
斐伊郷の末由を合せ見る小其意宇郡ハ天原郡と共
相接ける地小有ければ其本の御住處ハ斐伊を
りけるを屋代唯其御靈を鎮置給ふ所を構造せ給
ハるのこ聞ゆれば猶大原郡小有む御在坐たり
けり其ハ以前小素戔嗚大神此川上る鳥髮地小
して八岐大蛇を斬割給ハリ一其尾より神し劍
を得て大神御許小奉らせ給ひける事此の寶劍出現

章ノ所見たるが如く然るハ掘川上天淵記ハ素戔嗚
 尊奉ニ劍天照太神太神曰我屏ニ天岩屋時落ニ江州伊布貴
 山是我神劍也ト有て其ハ古語拾遺石窟段ハ令天目
 一箇神作雜刀斧及鐵鐸ト有る雜刀の中の一ハて鏡
 瓊ト共ハ相並べ懸たりハ神劍ハ幸慥ハ有る證有て
 寶鏡開如章の傳十九ハ小委ハ云々如く其天
 目一箇命ハ天津彦根命の御子ハ有ければ彼
 劍の出たりハ地を求て住せ給ふハ有べりハざれ
 ども又其所以無ハと云ハべりハる者あり斯れハ
 掘と云ふ地名ハ素戔嗚尊の古ハ無りハて此燖

皇紀

之速日命の天より降来坐て住せ給へるより起れる
 稱ある者あり然れハ右ハ引る式の斐伊神社ハ素戔
 嗚尊同社坐斐伊波夜比古神社ハ天津彦根命ハ渡
 せ給ふ可き者トあるハ所思えたるハ但神社ハ祭る神を
 甚可畏クハ有れども右の如く彼此ト引合て説の迫
 り来るが故ハ斯れハ有むハと云ハあり右の斐伊郷ハ風
 土記ハ属郡家ト有り此郷中有八株標杉素尊所理ハ蛇
 骨ト或書ハ云々由有りハ又船岡山郡家東北一里一
 百歩阿波枳閉委奈佐比古命ハ曳来居船則化ハ山是也故
 云船岡ト有り斐伊郷郡家ト僅ハ六町許の程あり
 命の御子大背飯三熊之大人ト有る神ト下ハ稻背
 脛ト見えたる同神ハ天津彦根命ハ叔姪の御
 間ト云い共ハ國平ハ降坐ハ神ありハ爲ハ其地傍ハ
 然る事ハ有右の如く考定めて姓氏録ハ且ハ見る

小攝津國神別天神ハ服部連燬之速日命十二世孫麻
羅宿禰之後也允恭天皇御世任織部司ヲ兼領諸國織部
因号服部連ニ見え河内國ハ服部連燬之速日命之
後也ト云事有リ借同録の例天津彦根命ノ御後
あるハ天孫ハ收ル可キなり此ハ當昔御紀ハ可キ
如此ク二處ハ出タる程の事ヲければ其出自甚シ
明クらシりけり此ハ天孫ハ收ル可キ
が天神ハ出タ天神ハ入ルべきハ天孫ハ交ルる多クけ
れハ其ハ二の町ハ先其麻羅宿禰ト云ハ此ハ床
子名ありける然るハ傳十七九十九ハ已ハ云るが古

事記石屋戸段ハ取天安河之河上之天堅石取天金山
之鐵而求テ鍛人天津麻羅而并ハ伊斯許理度賣命今作鏡
と有る天津麻羅ハ天目一箇命伊斯許理度賣命ノ天
香山命ハ御在リ坐ス謂ハ相槌ト成テ劍ト鏡ト
を特別テ作ル給ハる然るハ天神ハ紀ハ倭鍛
師等祖天津真浦ト有リ又綏靖天皇御紀ハ倭鍛師天
津真浦造真鹿鑿ト有る鍛冶ハ限リて然る麻羅又
真浦の称有ル心ヲ先著テ有ル又和泉國神別
神魂命八世孫天津麻良命之後也ト有る此ハ神魂命
と有るハ次ハ天津彦根命ノ後ハ可ク中頃漢籍
禮記ハ旗人不得テ以其威威君位也又日諸候不敢テ祖ハ天
子ハ故賜姓則異ハ祖廟也ト云ハ事ノ加キ御定行ハれた

△此れ統て思ふに
雲風土記に飯石
郡波多郷部家
西南二十九里波多
都美命天降坐
處在故云波多と
有ハ機持命の
義あり今畑村
云ハ都留は大明
神と其社有
右等の所由に依
て大ニ其據有て
思ふに傳世一
ニル云リ

りつと見え天孫あら上氏も多ク天神の中も收
りれたらも多けり此が有り無仁天皇三十九年御紀に
五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮作劍一十口云事
也見えたるに其下風は仕奉けむ鍛師の名右の天津
麻良命に當れり何れ然れば天津麻羅命より次
ニ其御齋して鍛師の行事以て仕奉れり一人ハ麻
羅宿禰の如く熯之速日命より世を遠く隔ても
其祖名を負持て仕奉りしが故に云稱あり然るに其
服部連に任され奉りし事ハ仁徳天皇四十年御紀に
天皇の雌鳥皇女の殿に臨幸る所皇女織縑女人等
歌之曰比佐箇多能阿梅箇儺麻多云云と有を釋し比
佐箇多能久方也阿梅天也以上欲謂金機之發語也箇

儺麻多金機也私記曰師說昔饒機以金鑠取鳴聲織也
と有が如く古機に金鑠を饒れりが天孫降臨章第二
一書ふに天目一箇神爲作金者と見えたるに其遠裔
の人等然る作金者を業に仕奉れりしり多く金機
を造るに就ては目馴て然る組織の事にも精しり
故に諸國の織部を惣領し仕奉る司に任され奉
りて終に服部連の姓に賜はりし者ありけり斯れハ
此熯之速日命を天津彦根命と同神と見る時ハ此に
左の事謂れ無し非ず其御子天目一箇命より次に鍛
冶の業を以て仕奉り允恭天皇御世に服部連の姓を

賜へりし由緒も少くも彷彿しうすむ有ける
但右の服部連と神服部連と別あり神服部連ハ右
の服部連の摺領ハ織部の中あり其ハ建羽楯
神の本ふして此と同一なり其ハ寶鏡開始章ハ云
ふ可く又天孫降臨章の傳ハ就て云ハバ其ト此
とを混同ハ爲る事ハ此
○熊野忍隅命ハ下章第三二書ハ熊野大
隅命と有り傳十五二百九十一丁引る出雲風土記ハ出雲
郡伊努郷郡家西北八里七十二步國引坐意美豆努命
御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社即坐郷中
故云伊努農神龜三年改字伊努ノ所見たるも同神して意美豆努
命御子と申すハ猶素戔鳴尊ノ申すむが如く故其赤
衾ハ伊努と云ふ地名ハ係れる發語あり意保須美ハ

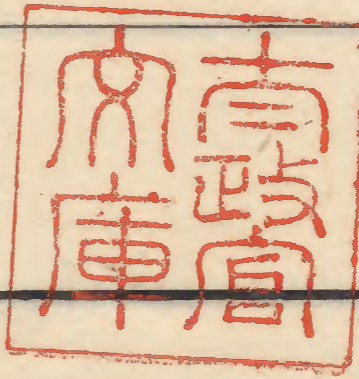
大隅少て此の忍隅是あり比古佐倭氣ハ男オノ眞別マコトして
彼物根の十握劍より成分り坐る御名あり然るハ此
神の御事を古事記ハ神活須毘神と出たり又其御
名の此ある熊野椽樟日命ノ同しきを以て其同神た
る御事ハ知れ又其即天總日命ハ御在り坐る事右ハ
本々ノ説るを以知べきあり但其同神たる事を見定
非不實ハ鈴屋大人の賜物あり其ハ古事記ハ大年神
娶神活須毘神之女伊努比賣ノ有を記傳ハ伊努ハ伊
努の誤あり由ハ云れつるハ起りて其風土記を見
るハ秋鹿郡伊農郷の下ハ出雲郡伊努郷坐赤衾伊農
意保須美比古佐和氣能命ノ后天彥津日女命ノ有る
其を式ハ神魂伊豆の賣神社ノ有り此ハ天總日命
の后神ハ伊豆能賣神ノ坐り又伊努比賣ハ其神の生
給へる事を知り明らめて後ハ出末る説ハ此ハ容易

く盡す可り今ハ傳十卷五十三丁又三百六十丁
十五卷二百八十七丁可き者と小委ありと云合せ見ら
る可き者又忍隅と申す隅ハ借字ありて進むる其ハ傳十
五二百十五丁五丁小云ろガ如く始三女神の成坐る也此御誓
小此二大神共天安河を中隔ありて誥り進せ給
はり御心を兼成坐る故小田心姫命依毘賣命
湍津姫命と申す御名も皆其心を以て負坐る小等
く此忍隅も大進の義あり然るハ古事記あり素戔嗚
命の勝佐備小勝進せ給へる御所業の御在坐る
ハ更あり天孫降臨章第七一書小其御名を勝速日尊
と出たるも速日ハ速振して急速リク進せ給へる

義あり又同章第三一書ある吾田鹿葦津姫の誓ひて
御子産給ふ所小火炎盛時生兒火進命又曰火酸芥命
と有る酸芥ハ右の三女神を合せて須勢毘賣命と申
奉る御名小同しも思ふ可し且此ハ御誓の御事
御心の進せ給御在坐る御中成坐る御子等小御在
外給故小女御子と男御子との御名の意も余り小
可き者者あり儲又佐備又須佐夫又曾と流ありと云し
同言あり其一二を云ハ万葉一十七丁小樂浪乃國都
美神乃浦佐備而荒有京見者悲毛又十九丁十九安見知之吾
大王神長柄神佐備世須登又二丁神長柄神佐備世須
登太敷為京字置而又二十丁春山跡之美佐備立有又弥

豆山跡山佐備伊座又宜奈倍神佐備立有又三十一浦
佐夫流情佐麻祢之ウラサヒ有る浦佐備ハ情進ウラサヒして荒魂
の進ウラサヒむより不サビ吟ウラサヒ和ウラサヒさすめ義ウラサヒあり神佐備ハ神進
しへ行ウラサヒさせ給ふ事ウラサヒの神進ウラサヒさせ給ふを申ウラサヒあり之
美佐備ハ繁進ウラサヒして草木の青くと茂り進ウラサヒむを云ひ山
佐備ハ山進ウラサヒして山形の瑞くと美くと成進ウラサヒむを云ひ
バ此恐隅と申す御名小由有る勝佐備も本より勝進ウラサヒ
して其御誓ウラサヒ不勝給へる御心の誇り進ウラサヒさせ給ふを云
るウラサヒ又二卷小字真人佐備而不言常將言可聞と有る
るウラサヒ貴人進ウラサヒして心高く打上りて物取合ウラサヒざるを云
るウラサヒ四巻小真十鏡見不飽君尔所贈哉且ウラサヒ父佐備作
居と有る左備も進ウラサヒして別れたる人の許ウラサヒ心の進ウラサヒ

自居ウラサヒあり又万葉十七ウラサヒ丁ウラサヒ小之良久母能知邊字於之
云意あり和氣安麻曾ウラサヒ理多可吉多知夜麻と有る白雲の千重
を押分け天進り高く立つと云ふ續けあり此を以て
曾ウラサヒ理の進ウラサヒむある事を知べし又九ウラサヒ丁ウラサヒ小智奴壯士
宇奈比壯士乃盧八燎須酒師競相結誓為家流時者燒
大刀乃手預押利白檀弓鞞取負而入水火尔毛將入
跡立向競時尔と有る須酒師ハ進ウラサヒ為ウラサヒして然る進ウラサヒむ所
為を成すを云ふり皆此の恐隅を大進ウラサヒと云ふ事ハ右
小引る如き例共の有ウラサヒ上ウラサヒ小殊ウラサヒ此ハ男御子を成ウラサヒ
出させ給ひて天照太神ウラサヒ清ウラサヒ心ウラサヒを以て参來ウラサヒれる由



を見え奉るむと所思進ませ御在り坐しを其本よ
 り明く清き御心小渡らせ給へるが覆ひ隠れし
 終小其験を得させ給へる小依て殊更小正哉吾勝と
 言舉せさせ給ひて勝佐備小勝誇らせ給へり御旨
 を以て御名小ハ負せ奉らせ給へる者あり又此恐ハ
 ハ大の義あり又此を以て其御時小勝速づらせさせ
 御在り坐し御事の大凡るる御事を曉り明らめ
 奉る可き者ありり凡ハ神小在れ人小在れ此を瀬
 小思ふ事の心の加く成以て出
 來る時ハ思えず色小出言小顯はる者小有けれ
 バ其有の任小女リし押包小隠す事無く心の限り物
 する事ハ實小真心ある者あり其を後世漢風の擬ふ
 輩あり然る時ありの有ても態し上方を飭して然

